

学校評価報告書 令和3年度 横浜市立獅子ヶ谷小学校

重点取組分野	3年度		
	具体的取組	自己評価結果	
豊かな心	①自ら問題を見つけ、そこから生まれる課題解決に向けて自分の考えをもち表現することができる授業づくりを行い、主体的に学びに向かう子どもを育てていく。 ②情報機器を活用して、学習に生かす力を高める指導を行う。	①昨年度は行えなかった研究授業も含めた重点研究を行った。課題の設定、言語活動、学習計画を子どもたちとともに考えたり、学年や低・中・高学年部会で教材研究をしたりすることで、少しずつ子どもたちの意識が教えてもらうという受動的なものではなく、自ら問題解決していくというものに変わってきている。 ②コロナ禍もあり、対話的な学習が難しかった分、ロイノートやズームを効果的に使い、情報収集や情報の選択、共有といった活動を積極的に行った。	A
生きてはたらく知	①挨拶運動に取り組み、挨拶の良さを実感させて、居場所が感じられる雰囲気づくりをする。また、自尊感情を高める取組を継続して行う。 ②授業で多様な価値観を認め合い、多様性を認め合える素地を培う。 ③地域の方々とのふれあい、地域愛を育てる学習を展開する。 ④課題意識を持たせて授業に入り、道徳的価値を把握して実践しようとする児童の意識を高める。 ⑤効果的な職員研修により、職員の人権感覚を研いで維持する。	①委員会活動や、6年生のクラスプロジェクト、職員の登下校時の送迎挨拶時間により、児童の自発的な挨拶が増え、児童の自尊感情や居場所づくりができた。②④道徳の授業や道徳的指導の積み重ねをはじめとする授業の展開で、職員の意識の維持と、児童の多様性を認める価値観が高まった。③地域の方々に見守られた環境が維持されている。⑤コロナ感染症の影響で、思うように研修が進まなかったが、校内の委員会で研修を重ねた。	B
特別支援教育	①各学年、単元の系統性を大切に、昨年度できなかった部分も補填しながら、運動をする楽しさを味わえる学習を展開する。 ②子どもたちが自分自身の体調に気を配り適度に体を動かさせたり、制限された環境の中で、できることを子どもたち自身で考えたりできるように、環境や場を整える。 ③給食委員会が、日々の献立やその日の給食に関わる情報を各クラスに発信し、食への関心を高める。	①昨年度取り組めなかった単元をコロナ禍での条件付きではあるが実施できた。運動を楽しむことは、工夫をしながら授業の中で取り組めた。 ②コロナ禍で年度後半は校庭改修工事のため、なかなか身体を動かすことを推奨していく取り組みは行えなかった。 ③ぱくぱくだよりの発信を毎日行い、全校児童に食育に繋がる情報を伝え続けた。	B
児童生徒指導	①配慮を要する児童の具体的な支援について、4月より年間3回と、大きな行事(運動会等)の前に全職員で共有する機会を設けられるよう心掛け、指導に生かすとともに、どの職員にも共通理解を図り、同じ対応ができるようにする。 ②通級指導教室、特別支援教室で指導を受けている児童及び、取り出し指導を行っている児童の個別の教育支援計画と個別の指導計画を保護者と話し合いながら作成していく。	①4月より、年間3回、配慮を要する児童への具体的な支援について、全職員で共通理解を図る会を設けた。会を通して、児童に対しての理解を深めるとともに、同じ対応を行うことができるようになるという意識を高めることができた。 ②通級指導教室で指導を受けている児童や取り出し指導を行っている児童の保護者と確認をしつつ、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成した。	B
健やかな体	①できることが明確になってきたので、人と人とのつながりを増やした授業を進める。 ②今年度の活動内容で始めていき、他の委員会とのつながりでの活動も取り入れられるようにしていく。 ③生活のしかたにも慣れてきたので、活動が制限されている中で、できるかどうかを見極めながら集団活動を実施していく。	①地域の人と関わったり、オンラインを活用したりして、校外の人と繋がる授業を行った。 ②制限中のため、可能な範囲で委員会活動を行った。来年度は現状を見据えた改善を行うようにする。 ③異学年と直接交流する活動は行われなかったが、6年生を中心に学校をよくするためのプロジェクトを立ち上げ、学校全体に発信し、よりよい集団形成を目指すことができた。	B
地域連携・学校運営協議会	①地域の豊かな自然教育を生かした教育活動の充実に努め、体験学習を通して、地域の「人」とのつながりを深め、地域のよさを実感できるようにする。 ②「横浜の時間」や生活科を中心に地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で一人ひとりの自己有用感を高める。 ③学年に応じて、地域住民や企業がかかわる学習活動を年間計画に位置付け、学ぶことや働くことの意義を考え、働いている方の思いや願いを知ることができるようにする。	①町探検で様々な「人」とつながるよう意図的に機会を設定した。獅子ヶ谷のよさを伝えたいという思いも、個々で内容や方法を考え、伝えることができた。 ②感染症対策で活動に制限がかかる場面が多かったが、校内での他者との関わりの中で、自分の成長を実感でき、自己有用感を少しずつ高めていくことができた。 ③低学年は、町探検で地域で働く人にインタビューをしたり、高学年はオンラインで企業と関わる機会を設けたりして、働くことの意義、思いや願いに触れることができた。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①体験学習や地域の「人」とのつながりを通して、豊かな自然環境を生かした教育活動の充実に努める。 ②安全訓練の中に外部の方からの指導講評や体験を取り入れ、安全な環境づくりへの意識を高める。 ③系統的な指導ができるように学校安全計画を作成し、学年ごとに計画的に安全教育を実施する。 ④ごみの分別チェック、毎日の牛乳パックリサイクル活動などを通して、環境保全の意識を高める。	①稲作体験学習や横溝屋敷見学など地域の「人」とのつながりを通して、豊かな自然環境を生かした教育活動を行うことができた。 ②コロナ禍のため、外部講師を呼ぶことが難しかったが、映像等を取り入れ、児童が防災を身近に感じられるような安全訓練を実施した。 ③学校安全計画に沿って安全訓練に沿った安全指導を行った。 ④牛乳パックリサイクルのための校内放送やポスターでの啓発を実施した。それにより、環境保全の意識を高めることができた。	B
環境教育	①家庭、地域、関係機関との連携を図り、地域の教育力を効果的・効率的に活用し、より豊かな教育活動へとつなげる。(授業サポート、見守り隊、情報教育) ②「学校だより」のほか、「学校HP」の内容を充実させ、学校の情報発信に努める。 ③教育懇話会で各地域の代表者の方々や学校運営協議会の意義と役割について共有し、2022年度の協議会設置に向けた人選と準備を行う。	①5年稲作体験学習の学習サポート体制をJAIに依頼し、効果的な学習の成果を得た。3年生の社会科で地域の農家と連携を図り、食育教育にもつなげることができた。 ②学校HPの更新回数を増やした。 ③新型コロナウイルス感染症対策の影響で、まち懇を開くことはできなかったが、令和4年度の学校運営協議会設置についての合意を得た。	B
	①学年研で、積極的に専任を交えていじめ防止に向けての情報共有を行う。その情報を児童指導部で共有し、専任が取りまとめ、対応に	①学年研の際には、児童の様子について毎回話題に挙げて、児童の状況把握に努めた	

いじめへの対応	<p>と行う。その情報と児童指導等部へ共有し、対応が取りよめる、対応にあたる。</p> <p>②毎月行われる「いじめ防止対策委員会」において、各学年の情報を、学年、学校全体で共有し、対応にあたる。</p> <p>③「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を、専任が中心となり、学年や学級で積極的に活用できるようアドバイスする。</p> <p>④いじめ防止アンケートを年2回行い、いじめの未然防止及び、早期発見、解決に役立てる。</p>	<p>差の拡大に懸念があった。</p> <p>②毎月開催した「いじめ防止対策委員会」において、各学年の情報を学校全体で共有し、対応にあたった。</p> <p>③今年度も、「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を活用しきれなかったため、次年度の課題であると感じた。</p> <p>④いじめ防止アンケートを年2回行うことで、いじめの未然防止及び早期発見に努めた。</p>	B
人材育成・組織運営 (働き方改革)	<p>①ミドルリーダーがメンターチームの運営や研修に携わり、若手教職員とミドルリーダーの育成を図る。</p> <p>②組織を改善し、校務分掌の充実と効率化を図る。全教職員が組織運営に携わることで人材育成を進めていく。</p> <p>③月1回の教務会、職員会議、週1回の学年研を行い、組織的な学校運営を行う。</p> <p>④午前5時間40分授業を継続し、児童の学習効果の向上と職員の働き方改革を進める。</p> <p>⑤会議と議題の精選、教材の共有化を図り、教職員が働きやすい環境を整える。</p>	<p>①メンターチームによる授業研やミドルリーダーを中心とした若手教職員の育成を図った。多様な教職員が関わる授業研の実施には、課題が残った。</p> <p>②組織運営の中心となる教職員に業務が集中する傾向があった。業務の分散化と中心となる人材の育成を進めたい。</p> <p>③会議記録を発信・共有し、組織的な学校運営を行った。</p> <p>④午前5時間40分授業を継続し、働き方改革を進めた。児童の学習効果向上には課題が残った。</p> <p>⑤教職員の放課後の時間を確保することができたが、働きやすい環境を整えるためには、更なる業務改善が必要である。</p>	B
ブロック内評価 後の気付き	<p>次年度も引き続き、道徳教育(合同研修・授業研究)を行い、小中合同の授業研究会等を通して、中学校ブロックで育みたい力を共有することを確認した。本年度はコロナ渦のため、オンラインでブロック内の課題検討委員会を行い次年度の確認を行った。今後の状況が変わらなければ、実情に応じた小中合同研究会のあり方を考える必要がある。児童・生徒指導に関してはカウンセラーの共有や児相・区役所との連携を引き続き行い、トラブルの事前防止に努めた。</p>		
学校関係者評価	<p>「まちとともに歩む学校づくり懇話会」の委員の皆様には、書面にて学校運営報告を行った。令和4年度に「学校運営協議会」を設置についての合意を得た。委員の皆様と調整しながら協議会委員の候補者を決定した。</p>		
中期取組目標 振り返り	<p>○本年度も引き続きコロナ禍で活動が制限されている中、昨年度からの取組を継続しながら見直す機会が得られ、本当に必要なことが何かということがより浮かび上がってきた。</p> <p>○児童の生活に落ち着きが定着し、授業の状況もよく、安心して学校生活を送ることができていた。</p> <p>○本格的に40分授業を開始し、授業改善及び働き方の改善につながった。来年度以降も引き続き行っていくことで、児童、保護者が学校に対する安心感がより得られるようにしていく。</p> <p>○オンライン授業やロイロノート、WEBの学習ドリルなどを分散登校や第6波の時に実施し、ICTの活用が推進された。</p>		